

# 戦後文壇と正宗白鳥『自然主義盛衰史』

—— 回帰する描写の時代 ——

吉 田 竜 也

1

三島由紀夫は敗戦後まもなくの自らの文壇デビュー時において、文壇が活況を呈しつつあるにもかかわらず、「大家の原稿とりに熱心で」なかなか自分の原稿を掲載させてもらえなかった苦心を回顧している。そこでメディアに歓迎された「大家」として挙げられているのは永井荷風と正宗白鳥で「当時、新雑誌が次々と出てゐたが、多くは大家の原稿とりに熱心で、新人が待望されるほど時代は落着いてゐなかつた。荷風、白鳥などの大家の作品が、久々に純綿米の御馳走を供されるやうに、新鮮な魅力で人々をうっとりさせてゐた」と述べている<sup>1</sup>。

荷風と白鳥とは同年齢（明治十二年生まれ）であるので並べられているのかもしれないが、荷風はともかく白鳥の作品が「純綿米の御馳走」であるとか、それが「人々をうっとりさせてゐた」という記述は、今日では奇異に映るかもしれない。しかし確かに白鳥は一種の〈流行作家〉といつていい存在だった。敗戦以降、昭和三十七年の死に至るまで、旧作を編んだ作品集を含めて毎年矢継ぎ早に白鳥の著作が世に出ている。例えば昭和二十八年には『現代随想全集第九卷』（創元社）、『思想・無思想』（読売新聞社）など白鳥の旧作の評論・随筆を集めた書物が多数刊行されているが、そうした様相を

して、時の「文藝時評」は「最近の白鳥ばかり」という表現をしている。

敗戦後から昭和三十七年の死までの白鳥とその作品への批評を概括してみると、悪評は多くない。そのような数少ない批判的な評価として、例えば「藝もなく老醜をさらしている」「老いの繰言である」<sup>3</sup>と述べている花田清輝や、「ぼくなんか正宗白鳥さんは全然読みたいと思わないし、読んだことがありませんね」という座談会での野間宏の発言などがある。いわゆる戦後派の作家・批評家たちは「八十越えて頭がしつかりしていて、構成力もあれば想像力もあるという作家は世界的に見ても珍しいんじゃないですか」<sup>5</sup>と述べている埴谷雄高などを例外として、白鳥に肯定的であろうが否定的であろうが、そもそも言及することすら稀であった。

こういった戦後派文学者における、白鳥ら自然主義作家への冷評や軽視が起る要因について白井吉見は「私小説や風俗小説をふくめて、自然主義的なりアリズム小説の敗退が決定的になつたということだ。(略)とりわけ戦後の批評活動はこの古い文学概念の批判と糾弾に向けられたといつていい」と説明している。しかし白井は続けて「正宗白鳥のような自然主義の老大家」でありながら、小説『日本脱出』(昭23)など、老年に至つてもなお文学的冒険を止めぬ白鳥への賛辞を述べている。<sup>6</sup>こういった自然主義作家でありながら、その域にとどまらず、また自然主義という自らの出自に懐疑し続ける作家として白鳥を評価する論調は、多く存在している。なぜ白鳥は戦後の文壇ジャーナリズムに受け入れられたのか。

白鳥が敗戦後の文壇において勝ち得た位置について、大杉重男は次のように興味深い見方をしている。「白鳥は自然主義作家の最年少として自然主義のスポークスマンのように見られていたが、その『作家論』を読むなら白鳥が自然主義や私小説の作家たちに対して辛辣苛酷であり、むしろ漱石に対して好意的であることは明らかである」というように、「夏目漱石中心史観」を立ち上げ、漱石らに劣るもの、あるいはその後景に退けられるものとして自然主義を配置したのが、他ならぬ自然主義作家・白鳥だったというのである。「白鳥は自然主義の擁護者というより葬送者であり」、昭和二十三年に白鳥が書いた『自然主義盛衰史』とは、「鎮魂の書を装いながら戦後ジャーナリズムへの適応を目指して書かれた」<sup>7</sup>書物な

のだというのである。自然主義を文学史上のヒールとして捉えたいという、戦後文壇の論調に白鳥自ら加担しているばかりではない。自然主義を日本近代文学史におけるステイグマ、やがて乗り越えられるべき現象であったとして捉えること、そのような見解を自然主義作家自らが語ることに、それは潔さや客観性という印象をもたらしたのであろうと考えられるのである。

実際、例えば日本の文学に巣くう私小説性を打破し、「想像力を十全に發揮する作家はいないか」と訴えた服部達のような批評家からも『自然主義盛衰史』は「自然主義文学に対するアムビヴァレント（愛憎二筋道）な態度を、独特な散歩風のスタイルで表現していて、たいへん面白い書物である」<sup>9</sup>などと高く評価されたりしている。また先に引いたが「正宗白鳥さんは全然読みたいと思わないし、読んだことがありませんね」と述べていた野間宏も「正宗白鳥の作品のなかで、私をもっとも親しみをもって、繰り返しようにして読んだのは、その批評文、または「自然主義文学盛衰史」のような文章である」<sup>10</sup>と述懐している。その意味では大杉の見るところの白鳥の戦略は功を奏したということになるが、しかし白鳥は本当にことさらに自然主義をネガティブに捉えているのみなのか。つまり服部という「愛憎」の「愛」の部分を検討してみたい。

## 2

『自然主義盛衰史』（以下、『盛衰史』とする）は雑誌『風雪』に昭和二十三年三月から十二月まで十回にわたって連載され、同年十一月に六興出版部から刊行された。連載二回目である『風雪』四月号の「編集雑筆」に「泡鳴、花袋、秋声、藤村の線を身を以て縫つて来られた氏の回顧史であると共に、明治、大正、昭和を通じての日本文学生成史でもあり、貴重な文献でもあると信ずる」とある。また連載最終回の十二月号の「編集雑筆」には「自然主義作品が後世に及ぼした功

罪は評家の論に俟つとしても、この一時代が日本の文学史に厳存したことは否む由もなく、これを体験として述べられる氏の文は興深いものがあつた。文献としても今後得難いものになることであらう」とある。「功罪」であるとか「厳存したことは否む由もなく」といった表現からうかがえるのは、自然主義文学を否定的に見る見方の存在である。また「身を以て縫つて来られた」「体験として述べられる」とあるように、かつてあつた自然主義、その同時代者としての白鳥の証言ということを強調しており、これは『読売新聞』（昭24・3・2）「新刊」コーナーにある「自然主義文学の流れを経て唯一人生き残っている証人白鳥が冷徹な批評眼を光らせながら綴つた文学史話、日本自然主義文学の赤裸々な姿がいかんなく描き出されている」というコメントでも共通している。「日本自然主義文学」は「流れ」去つた、それを身を以て知っている「証人」は、もはや白鳥一人であるというのである。ここでも終つたこと、歴史化されたこと、そしてそれを身を以て体験した人の証言、ということを強調している。

実際『盛衰史』は以下のような象徴的な挿話から書き出されている。

徳田秋声の記念碑がその郷里金沢に建設されたさうである。島崎藤村の記念堂がその出生の地木曾山中に建設されたさうである。これ等の文学者が尊重される時代になつたのであるか。往年の自然主義作家でも、傑れたるものは世人に敬意を寄せられる時代になつたのか。藤村も秋声も、よはひ古稀を過ぎるまで生存して、その長い生涯の間執筆を怠らず、最後まで殆んど創作力の衰へを見せなかつたと云はれてゐる、二氏は、自然主義作家のうちで最も完成した、代表的作家であるやうに、文壇に於いて認められてゐる。それで、この二氏の死によつて、自然主義文学も一先づ結末を告げたやうに私には思はれるのである。（略）これからの文学は、時代の激しい変遷につれて、どういふ経路を取るか、未来の事は誰にも分からないのであるが、在来の自然主義文学が復活して勢ひを揮ふことはないに極つてゐる。（二）

白鳥にとつての「知友」であった自然主義作家は、もはや物故し「記念碑」「記念堂」という形でメモリアル化されている。それが象徴しているように「この二氏の死によつて、自然主義文学も一先づ結末を告げたやうに」白鳥には思われ、今後「在来の自然主義文学が復活して勢ひを揮ふことはないに極つてゐる」と言い切る。確かに自然主義文学をすでに終つたもの、死んだものとしてその記述をはじめている。「葬送者」（大杉重男）として自らを位置づけ、さらに唯一の生き残りとして自らを特権化しているともとれる。

また『盛衰史』に対する批判としてしばしば挙げられるのは、自然主義文学に対する、ことさらなまでのネガティブな言及に対してである。佐々木雅彦によれば、確かに白鳥のいうように「生」「家」「黴」「新生」といった自然主義の諸作品には「人生の艱難を黙然と耐えてゆく人間の記録が息苦しいばかりに描かれている」が、そのような「艱難」の記録から「現在強いられている底無しの停滞を越えて、人間としての理想へにじり寄りんとするような精神の鳴動」は一向に現れない、という点に特色がある、とする。そしてこれらの小説の主人公たちは「艱難」をただ受苦的に、宿命として享受するだけであるが、それは藤村らの作品が持つ特性というばかりでなく「なによりもそういう精神の発見や創造への冒険を、記録するものの心が拒むのである」と述べている。「記録するもの」すなわち白鳥その人が、自然主義の諸作家・諸作品を「幻滅」「悲哀」といったいわゆる自然主義的観点において捉え、あるいは引き摺り下しているのではないかと佐々木は疑念を呈している。このように「虚無的否定主義者を装う鬼面」<sup>12</sup>ほとんど偽悪的なまでの書きようが、この書物の個性であり、またそれが限界や偏りでもあると指摘されてきた。

しかし、そのように白鳥は自然主義文学を、ただネガティブなものとしてのみ捉えているのだろうか。また自らを自然主義文学から超越した者として、その記述する立場を定めているのだろうか。以下『盛衰史』の記述を追っていくが、その前に白鳥の「文学雑感」（『新文庫』昭22・7）という文章にまずは触れておきたい。なぜ戦後という時間に白鳥は『盛衰史』を語るのか、『盛衰史』の前史、導人ともいえる位置づけにある文章であると考えられるからだ。

「文学雑感」で白鳥は「終戦後、雑誌は夥しく刊行され、それにつれて新作の小説が夥しく出現し」ているが、「しかし、よく次から次へと新作と称せられる小説が出るものだ」と驚き、あきれている。そして幼少時代から数多の小説を読んできた自分にとって「小説を作る上では人智の限りが尽くされてゐることを知つてゐる。これ以上どうにもならないで、同じ事の繰り返し返し」のように感じられるという。小説がオートマテイクに生産され氾濫している中、白鳥が瞠目させられたのは八十三歳になる小杉天外が新作「くだん草紙」を発表したことだ。そして筆は天外についての追想に進む。白鳥にとって「初姿〔明33〕など明治期の天外の作品とは「硯友社と自然主義者の作品の間を橋渡しをしたやうな」存在であり、彼は「写実を徹底しようと志した」先駆的な作家だったというのである。しかし天外の作品は「功を奏」さず、「写実といふ小説技術も六ケしいものである」と考えさせられたという。

こうした天外への追想から、白鳥はあることに思い至る。戦後という現在にいたるまで、小説はひたすら量産されているが、これまでどのような小説も書けなかったことがある。それは「今の世の中をすぐれた写実の筆で思ふ存分に描写した」小説、「作者の主観をまじへない、有るがまゝの叙述であり描写」によつて書かれた小説である。そのような小説があれば「私小説の形を取つても、本格小説の形を取つても」いずれであれ「さぞ面白い物が出来ることであらう」というのである。

しかしすぐさまその難しさについての言及を付け加える。丹羽文雄の徳田秋声『縮図』評にある、秋声ほどのリアリストもリアリストに徹しきれなかったという言葉を引き、白鳥は「秋声の写実、天外の写実。この他明治以降のさまざまの作家の写実が、どれもまだあやふやで真に徹するといふ程度に達してゐないのを、我々も認めなければならぬのだ」

とし、「写実といふものも六ヶしいものだ。型に捉れないで、いき／＼と周囲を描くことだけでも容易なことではないと、私は今更のやうに考へだした」と述べてこの文章を閉じている。

かつて自然主義全盛期に、白鳥は坪内逍遙の『蒲団』への批評の中で「吾人は小説に関する見解で最も意義あり、明治文学史発展の上に忘るべからざる者は、「小説神髓」以来では小杉天外氏の写実主義（初姿？の巻頭にあつた自然は善でもない悪でもない、だから有のまゝ、に描けばそれでいゝと云つた説」と花袋氏が「野の花」の序文以来頻りに説いた議論だと思ふ<sup>13</sup>」と述べていた。白鳥は坪内逍遙のほか天外と花袋の影響を受け、「有のまゝ」な描写を志すが、しかしその不可能性に逢着し、以降「有のまゝ」に書くことの不可能性をしきりに言い募っていく<sup>14</sup>。そして戦後、天外の新作に触れた白鳥の脳裏によみがえつたのは、描写をめぐる当為と不可能性の問題が席卷していた時代、自然主義全盛期前後のことだったのではないか。

そのような観点で『盛衰史』を見ていくと、例えば第一章の逍遙と森鷗外との間の論争について触れている箇所で、白鳥が逍遙からどのような影響を受けているのか述べている点が注目される。『小説神髓』の所説にしても、「没理想論」にしても甚だ不徹底なもの<sup>15</sup>だったが、しかし「物の真相に触れんとしたところがあつた。記実を志し、有るがまゝ、に物を視んとした態度は、後年の自然主義と相通ずる」し、のちに「早稲田出身の青年文学者達が自然主義に迎合するやうになつたのも、逍遙の『小説神髓』「没理想論」以来の自然の経路」だつたとしている。もちろん「早稲田出身の青年文学者達」には白鳥自身も含まれる。世評では逍遙は「反逆性がない」「通俗作家」だと見なされているが、「記実を志し、有るがまゝ、に物を視んとした態度」は明治以前には存在しない態度であり、それは「旧文学」への「反逆」という側面を持つ。逍遙の主張とは極めて画期的なものであつたと評価しているのである。

『盛衰史』において、白鳥が文学者を、あるいはその主張を肯定的に捉える否か、その観点とは「記実を志し、有るがまゝ、に物を視んとした態度」の有無によつて貫かれていゝといつていい。先に引いた大杉重男の文章に「自然主義や私小説の

作家たちに対して辛辣苛酷であり、むしろ漱石に対して好意的である」という指摘があった。確かに『盛衰史』でも「自然主義の重な作家は、創作家としての天分が概して豊かではなかつた」が、「これ等に比べると、夏目漱石はたつぷりした創作能力を生れながらに有してゐたと云つていゝ、」(九)など、いたる所で漱石らに賛辞を述べているように見えるが、しかし白鳥は以下のようにも述べている。

花袋泡鳴をはじめ、藤村でも秋声でも創作的才能は豊かではなかつた。それ故、コツ／＼と現実の生活の悩みを書いて、人生の眞実がおのづからそこに現れるやうになつたとも云へるであらう。漱石の如く、才にまかせて面白づくで書き流したものは、却つて眞実を逸することがありさうである。(九)

漱石は苦もなく創作をしているといった言い方に対して、それは「驚くべき詮索不足の断定」であると片岡良一が批判しているが、<sup>15</sup>確かに白鳥に漱石への誤解があるかもしれない。明治四十三年に漱石が自然主義者に対し「此派の人々は現実を描くと云ふ」が、その結果「現実曝露の悲哀」や「客観の真相に着して主観の苦悶を覚ゆるといふ」ことに「一々賛成である」と述べている。なぜ「賛成」なのかといへば「此苦悶は意の如くならざる事相に即し、思ひの儘に行かぬ現象の推移に即し、もしくは斯くあれかし、斯くありたしとの希望を容れぬ自然の器械的なる進行に即して起る矛盾扞格の意に外ならぬ。云ひ換れば客観の世界が主観の世界と一致をかくが為である。現実が吾に伴はざるの恨みである」と<sup>16</sup>いった事態をもたらすことを漱石も理解しているからだといふのである。現実を〈ありのまま〉に書こうすれば、自己と外部、言葉と事物の乖離をことさらに意識させる、それが「悲哀」「苦悶」の内実であると理解している漱石と、白鳥との間に距離はほとんどなかつた。白鳥の側に漱石への誤解があることは明白だが、ここで注意したいことは白鳥の価値判断の仕方である。つまり白鳥見るところの漱石がしているように、言葉が言葉を生むように「書き流す」のではなく、愚直に対象



を記述しようとする態度の方に重きをおいているという点である。

洋行から戻ってきた島村抱月に、早稲田の同窓の先輩として期待を寄せていた白鳥だったが、「囚はれたる文藝」(明39)を読んでも「文藝が世界的に統一されるとか、東洋の文藝が起るべきだとかいふやうな、空漠たる議論は、当時青年であつた私などには、何の刺戟も与へなかつた」(二)という<sup>(47)</sup>。しかし花袋の『蒲団』への批評にある「虚偽を去り虚飾を忘れて、痛切に自家の現状を見よ。見て而してこれを真摯に告白せよ」といった言葉には「感銘」を覚えたという。白鳥は抱月のどのような言葉には幻滅し、どのような言葉には感銘を受けるのか。その分かれ目は「真実」へ立ち向かつていく態度が示されているか否かにあるのである。そうした白鳥の感銘とは、花袋や抱月のように「真実」の追求を明言している文学者にはかり寄せられるのではなく、島崎藤村のようにそれとは明言していない文学者の作品から「たゞ真実を写さんと志したことから、かゝる作品を製作することゝなつたのであらう」(二)という態度を読み取り、中でも『家』(明43)を「事件が発展しないで、小説にも芝居にもならなかつたのだから、普通の小説読者には飽き足らぬ訳だが、事実がさうであるのなら如何ともし難い。自然主義作品の自然主義作品たる所以である」などという観点において「自然主義の最好の代表作」(五)と評価していることから、白鳥のいう自然主義文学の内実がうかがえる。

漱石ら非(反)自然主義者との違いを説明して白鳥は「現実」に徹せんとする態度と、藝術化せんとする態度との相違である」(二)としている。つまり白鳥にとつての自然主義文学の定義とは「記実を志し、有るがまゝ、に物を視んとした態度」、「現実」「真実」に迫ろうという態度のことだということになる。

#### 4

そのように考える白鳥にとつて、例えば森鷗外の『キタ・セクスアリス』(明42)は、「この時の鷗外の製作態度は真剣

ではなく、「自然派の連中が盛んに性欲描写をやるから、おれも書いて見た。どんなもんだい。」と遊び気分で鼻うごめかしたのであつた」とあるように「製作態度」の「真剣」さの欠如において、自然主義文学とは似て非なるものだという認識にある。一方で白鳥は鷗外の作品のいくつかを「他人を描いても、客観的態度で人生の真実を描いて、自然主義の骨法を心得たものも少なくなかつた」とし、『洪江抽斎』（大5）などに対し「自然主義の理論を押し詰めた極致の作品」とまていつている。しかし注意したいのは「骨法を心得た」とか「理論を押し詰めた」といった言い方である。そのような操作性、主体性を行使しうる点に、自然主義文学者との大きな差異を見ているのである。

続けて白鳥は「日本の自然主義作家と作品の人むれは、世界文学史に類例のない一種特別のもの」と云ふべく、稚拙な筆、雑駁な文章で、凡庸人の艱難苦悶を直写したのが、この派の作品なのだ」（九）と述べている。そして才能のない書き手の難渋する筆使いと「凡庸人の艱難苦悶」の人生とをアナロジーの関係で捉えている。

「凡庸人の艱難苦悶を直写した」文学者とは、近松秋江、岩野泡鳴、秋声らであり、また花袋や藤村も含まれる。白鳥は「彼等は自分の行動や心理をよく小説の材料とした。自分で自分の身を喰つて生きてゐたものである」と表現しているが、また白鳥自身も「小説の材料」にしばしばされた。ところが「有りのまゝに」「直写」しているはずの彼らの作品に、白鳥は自らが見聞したこととの違いを見出ししている。

ところで、この有りのまゝに書く事、敢然として真実を記録し描写せんとする事は、何処まで徹底してゐたであらうか。実際の人物を知つてゐるだけに、小説中の人物と照り合せて、さすがによく描いてゐると感心することはよくあるが、何処まで真実を語つてゐるかと疑はれることもあるのだ。私自身でも、有りのまゝに自分や身の事を書くてゐるやうに云はれることがあるが、実は、世間の思つてゐるほど自己告白をやつてゐないのだ。そんなにアケスケと自分の所行を描出してゐる訳ではないのだ。故意に本当らしく見せかけて嘘を云つてゐる訳ではないのだが、

書きたくないことは書いてゐないし、まだ一しよ懸命に本当の事を書いてゐるつもりでも、知らず／＼眞実を外れてゐることが多いのである。

他の作家はどうであらうか。他の自然主義作家達は、私よりも一層深く、有りのまゝの自己を描き身の光景をも叙述してゐるやうであるが、果して彼等の作品が眞実に徹してゐるのであらうか。私は甚だ疑はしく思ふ。自分に都合の悪いところは除いてゐるであらうし、取扱ふ人物について知らず／＼勝手な解釈を試みてゐるのではあるまいか。

(六)

「眞実」は書こうとしても逃れてしまふ、それは知友たちの書いたことと自らの見聞とを比較すればはつきり分かるし、自分もまた例外ではないと述べているが、その上で白鳥が注目しているのは「描写せんとする事」「一しよ懸命に本当の事を書いてゐる」……といった志向性がどのような結果になつてゐるか、ということに對してである。

自然主義全盛期において白鳥は、自然主義の異色な点を、「その真相を見んと努力してゐる」という志向性において捉えていた。<sup>18</sup> そのような志向性は必然的に「逸してゐる」「間違つてゐる」という結果に陥る。その結果言葉の不可能性をしきりに言い募るようになったというのが自然主義全盛期の白鳥であつた。一見、六十九歳の白鳥はここでもおおよそ同じことを繰り返して述べているように見えるのだが、興味深いことは、上記引用部に続く記述である。「秋江は私の事を立ち入つて作中に取り入れてゐるが、善悪如何に関らずよく間違つてゐる」と述べているが、周知のように、明治四十三年頃に秋江と白鳥はある女性をめぐる三角関係状態に陥つており、両者ともその女性とのことを、あたかも競作であるかのごとく互いに書き合つていた。<sup>19</sup> しかし『盛衰史』の白鳥はこのことにまったく言及していない。つまりここで白鳥は書く人としての自分を後景化させ、書かれた側として、また換言すれば一読者の立場に立つて叙述をしているのである。それは単に三角関係の当事者としての自身を隠蔽したというばかりでなく、自然主義全盛期における、書くこととその蹉跌に苦し

む自身をも隠蔽したか、あるいは忘却したのか、ということになる。こうした書き手から読み手へという立場の変換は、最後の十章における二葉亭四迷への言及において、より明瞭に現れている。

白鳥は二葉亭の談話筆記「私は懷疑派だ」（『文章世界』明41・2）を「自然主義を追窮してゐる今、二葉亭の昔語りは、聞き棄てにならないのである」としている。「よし自分の頭には解つてゐても、それを口にし文にする時には、どうしても間違つて来る。真実の事はなかく／＼出ない」のだから「小説の上ぢや到底偽つばちより外書ん」という考えに二葉亭は至る。ここまでは白鳥も同意するところである。ところが二葉亭は、「真実」は書けないからこそ、どうしても文学に対して「真剣にやなれない」し、また「真剣になれるといふ人があれば私は疑ふ」とまで述べている。だから文学とは所詮「第一二義のもの」でしかなく、どんなに「真実」を書こうとしても、所詮それは絵空事と変わらないのである。

「真剣に」知ろう、あるいは書こうというのが自然主義だとすれば、二葉亭はそのような態度も無意味なことだと否定している。こうした二葉亭の言葉に白鳥は「私は、数十年前の二葉亭の文学感想にも同感するのであつて、文学と人生の真実についても、稍々もすると懷疑に捉はれる」とするが、続けて以下のように述べていることに注意したい。

しかし、畢竟作り物語に過ぎないやうな文学に於いて、真実の世界の活躍を、實際界に於いてよりも一層いき／＼と感得することがあるのだ。これは否定されないものである。日本の自然主義文学に於いて私は特にその気持を体験してゐる。秋声秋江小剣泡鳴花袋、或ひは藤村などに、深いか浅いか、兎に角数十年間も接触して、その日常の談話や行動や人となりを直接に見聞きしてゐるので、その見聞と作品とを照らして、如何に真実が現れてゐるか、真実が見逃されてゐるか、意識的に嘘が入つてゐるか、無意識的に嘘が描叙されてゐるかを想像して、文学と人生とを私は味ふのである。傍観者たる私の想像であるから、これも真を逸してゐるであらうが、彼等の生存の世界が、私にはいき／＼と映つて来るので、それがうそであれまことであれ、私をして人生を知得させるのに、他の何物よりも役に立

つと云つていゝのである。(十)

ここで白鳥は、書くことと書かれたものとの関係を、(トライ)と(エラー)の関係で捉えようとしている。そして「真」を逸してゐるであらうが「それがうそであれまことであれ」というように、「真実」の再現性、その成否の如何という問題から身を引きはがしている。たとえ(エラー)で終わったとしても、そこにむしろ「文学と人生」の「味」わいが感得できるというのである。

書き手として言葉と対峙し、どこまでも「真実」なるものに拘泥するなら、二葉亭のような「懐疑」に立ち至り、ニヒリズムに陥ることは必至である。もちろんそのような言葉への「懐疑」を白鳥も共有するが、しかし白鳥はそのようなニヒリズムを回避するべく、表現にまつわる限界を、読むこと・味わうことへと横滑りさせることで、解消しようとしているのである。ニヒリズム、文学否定などといった白鳥にまつわる世評があるが、そうした評価は白鳥以上に二葉亭によりあてはまるのである。

## 5

白鳥は「寂寥無限」(『明治大正文学研究』(二)昭24・6)という文章で、『盛衰史』を書きあげたのちに「私は「有るがま、」を描写する自然主義を徹底すると、何が有るがま、かとの疑ひが起つて、神秘的の境地に達しさうな感じがした。有るがま、を手軽に考へて、自分の目にうつり耳に聞えたゞけのものを丹念に叙述したつて、それは真の有るがま、でないかも知れない」という考えに至つたと述べている。そして同文中で白鳥は「日本の近代文学史に於ては、自然主義文学運動は意味深いものであると新たに思直した」とも述べているが、ここには暗に敗戦後の文学への批判が内包されて

いるのではないか。

白鳥は『盛衰史』の中で「懷疑は何時でも終点を意味するものではないから、これに住ずる限り、必ず何等かの形、何等かの程度で終点を知らうとする努力若くは要望が残る。(略) 知れないものを知らうとする。このパラドックスがやがて造化の神秘なのであらう」という抱月の言葉を引き、「あの頃の自然主義の本領が」そこに「存在してゐたのである」(四)としてゐる。知ろう・書こうと志向しない限り、「真実」を知ることと表現の不可能性に思い至ることはないし、また知りえない・書きえない世界への「神秘」を感じることはない。自然主義は「努力若くは要望」と不可分なものであり、その意味で決して消極的なものではない。「自然主義は否定の文学のやうに、私自身は解釈してゐて、實際さういふ傾向が、日本の文壇に於いても看取されてゐた」と白鳥自らいつてゐるやうに、これまで自然主義文学を「否定の文学」と見る見方が大勢を占めてきたし、この『盛衰史』を書く白鳥もそのように見なされてきた。しかし白鳥は続けていう。「が、しかし、今度諸家の作品を読み返して見ると、彼等の生きんとする努力は、強弱如何にか、はらず、そこに存在してゐるのである」(七)。知りたい、見たい、そして書きたいという強固な志向性に支えられているのが自然主義の作品なのであり、白鳥自身も改めてそのことに気付かされて驚いてゐるのである。

『盛衰史』には、回想の枠から外れる形で、以下のような戦後文学へのコメントがある。自然主義文学者が描いた「生きるための悩み」は、敗戦後の今日の、生きるための悩みとは趣が異つてゐた。今日の作家は、彼等よりもつと深刻な生ける悩みを作品の上に現してゐる筈である。果たしてさうであらうか」。そして「今後の文学は、時世が時世だから、菊池(寛)風の朗らかな系統のものが盛んになりさうには思はれない。時世の悩みはおのづから作家の心に宿つて、その作品にしみ出るやうになるのではあるまいか」(八)と続けている。分かりづらい表現だが、自然主義全盛期の時代に比して、現代は深刻な時代になりつつあるが、しかし現代の作品には第一次大戦後の菊池寛の作品のような「上江り」したものがあふれており、今の時代の深刻さはまだ作品に現れていない、といつてゐるのである。

敗戦後の白鳥は天外の新作に触発される形で「有るがまゝ」に書くことを志した、いわゆる自然主義全盛期を想起し、『盛衰史』を書いた。そしてすべてを知り、書くことの不可能性とそれへの夢が『盛衰史』の根底を貫いていた。『盛衰史』を書き終えた白鳥に、戦後の文壇はどう映るか。『盛衰史』からおよそ二年後、白鳥は天外との会談記を以下のように書き出している。

「この頃の小説をお読みになりますか。」と、私は声に力をこめて訊ねた。

「読みます。」と、九十歳に数年を余すばかりの天外翁は答へた。

「どうお考へになりますか？」

「書く事に親切がない。」実が入つてゐない、真剣味が足りないといふ意味の言葉が、淡々とした口調でありながら、疑ひを容れぬ、断定的の批判としてもらされた。

「私など、昔はそれは真剣にやつたものです。」

「さうでせうな。」私は、ほとんど半世紀もの昔の、翁の風貌態度を鮮明に思ひ出した。明治文学史中のある時代が絵の如く、あるひは映画が回転してゐる如く目に浮かんだのであつた。〔小杉天外翁と語る〕『読売新聞』昭26・1・8)

天外が現代の小説をどう考えているか、「声に力をこめて訊ねた」というが「力をこめて」という言い方は、白鳥の文章においては極めて異例の表現ではないか。現代の小説に白鳥も不満を持つてゐる、それは天外とも共有されるはずだと考えているのではないか。実際天外は現代の文学に「真剣さ」の欠如、あるいは対象を書くことへの努力の欠如を指摘している。つまり自然主義的な志向性があつたかまなきがごとくになつており、ひたすら「上塗り」した作品が量産され続けている。

いる、そのことに天外も「断定的の批判」を与えているのである。そして引用部に続けて白鳥は「真実の描写を小説の上に試みんとした小杉天外の作品は、あの時代に清新なものとして文壇の注意をひいてゐた」と書き添えている。

『盛衰史』の末尾には「自然主義文学のやうな、いつまでも解決のない文学の境地に永遠にさ迷つてゐるのは遺憾であるが、それを如何ともし難いのである」とあるが、これは自嘲の類ではないだろう。続けて白鳥は「貧寒なる文学、愚かなる迷へる文学として、我が自然主義文学を回顧する外ないのであるが、さうかと云つて、この種の文学を踏みにじつて仁王立ちになつてゐるやうな、人間救護の、解決ある大文学はまだ何処にも現れてゐないではないか」(十)と述べている。自然主義文学を最低の鞍部で越えるな、ということである。

## 注

- (1) 三島由紀夫「私の遍歴時代」(『東京新聞』昭38・1・10)5・23
- (2) 齋藤兵衛「信長をめぐる―文藝時評―」(『文学界』昭28・10)
- (3) 花田清輝「文壇に『歌笑』ありや?」(『西日本新聞』昭25・4・13)
- (4) 青野季吉・蔵原惟人・小林秀雄・伊藤整・中島健蔵・中村光夫・野間宏「現代文学の全貌」(『文藝』昭25・4)
- (5) 埴谷雄高・中村真一郎・佐々木基一「創作合評」(『群像』昭36・11)
- (6) 白井吉見「今年の文学界に期待するもの」(『東京タイムズ』昭27・1・8)
- (7) 大杉重男「私小説、そして／あるいは自然主義、この呪われた文学」(『日本近代文学』59、1998・10)
- (8) 服部達「未来への脱出路」(『群像』昭30・9)
- (9) 服部達「私小説の美学」(『群像』昭30・8)
- (10) 野間宏「自然主義文学盛衰史」に触れて」(『海燕』1986・6)。ただし野間は同文で『盛衰史』は二葉亭四迷が新しい日



本語を生み出していこうとする、その「苦惱」や「苦心」を易々と通過して描いている、と批判している。二葉亭に対する白鳥の評価については、後で触れる。

- (11) 佐々木雅発「正宗白鳥『自然主義盛衰史』について」(『国文学 解釈と教材の研究』1967・7)
- (12) 片岡良一「自然主義盛衰史」その他(『文学』昭24・9)
- (13) 正宗白鳥『蒲団』合評(『早稲田文学』明40・10)
- (14) 拙稿「書けない」小説家―正宗白鳥の「盲目」―(『国語と国文学』2005・8)で論じた。
- (15) 片岡良一、注12と同。
- (16) 夏目漱石「文藝とヒロイック」(『東京朝日新聞』明43・7・19)
- (17) もっとも昭和六年における白鳥の回想「明治文壇総評」では、このような抱月の所説について「今日これを読み直すと、その中に書かれてゐることがよく分るのである」(『中央公論』昭6・4)と述べており『盛衰史』での回想とは温度差がある。この差について岩佐壮四郎は「明治文壇総評」は「世界漫遊」の旅から帰国した「後の文章であり、また「両者の間には戦争が介在して」おり「それが両者の記憶に微妙に反照している」と述べている(『島村抱月の文藝批評と美学理論』早稲田大学出版部、2013・5)。昭和初期の白鳥の批評や感想については別稿で検討したい。
- (18) 正宗白鳥「随感録」(『読売新聞』明40・12・8)
- (19) 山本芳明「ある三角関係の力学―「動揺」と「別れたる妻に送る手紙」をめぐる」正宗白鳥ノート4―(『学習院大学文学部研究年報』38、1992・3)で詳しく論じられている。
- (20) 島村抱月「懷疑と告白」(『早稲田文学』明42・9)

(文学部助教)

〔付記〕

本稿は、早稲田大学国語教育学会愛知県支部研究発表会(二〇一三年十二月十五日、於愛知淑徳大学)での口頭発表を

基にしたものである。当日ご意見・ご教示いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

本稿は、愛知淑徳大学研究助成（研究期間…二年間、平成24年度～平成25年度）による共同研究「近現代日本における批評精神の変遷」の成果の一部をなすものである。